

針刺しおよび血液・ 体液曝露防止

学習内容

1. 血液媒介病原体の概要
2. 血液媒介病原体への曝露時対応
3. その他の感染症と対応

医療従事者の健康管理

医療従事者には、

患者などから感染を受けるリスク

と

感染源となるリスク

がある

血液媒介する病原体

- B型肝炎ウイルス(HBV)
- C型肝炎ウイルス(HCV)
- ヒト免疫不全ウイルス(HIV)

血液媒介病原体の感染源

- 血液
- 体液(精液、腔分泌液、羊水、
脊髄・肺・関節に含まれる体液)
- 生体組織
- 血液製剤

血液媒介病原体の感染伝播経路

- 針刺し・切創
- 創傷面への曝露
- 粘膜への曝露



曝露がおきたら何をすべきか

- ただちに接触部位を洗淨
有機物の除去を目的とする
血液の絞り出しは効果が少ない
- 血液媒介性病原体に関する検査
被受傷者自身
患者

B 型肝炎

- 針刺し・切創の感染率は30%(免疫がない場合)
- ワクチン予防可能疾患→ワクチン接種を推奨
- ワクチン接種後の抗体検査
 - ・ 接種による抗体獲得の確認
 - ・ 抗体価の定期的確認
- 曝露時の対処
 - ・ 免疫グロブリン (HBIG)
 - ・ 肝機能のフォローアップ

C型肝炎

- 針刺し・切創での感染率は1.8%
- 感染した人の多くは慢性肝炎となる
 - ・ 肝硬変、肝がんへと進展
 - ・ ワクチン予防疾患ではない
 - ・ インターフェロン、抗ウイルス薬等による治療
- 曝露時の対処
 - ・ 肝機能のフォローアップ
 - ・ インターフェロン等による治療

ヒト免疫不全ウイルス (HIV)

- 針刺し・切創による感染リスクは0.3%
- 曝露時の対処
 - ・ 抗ウイルス薬の予防内服の必要性を考慮
 - ・ 血液検査によるフォローアップ

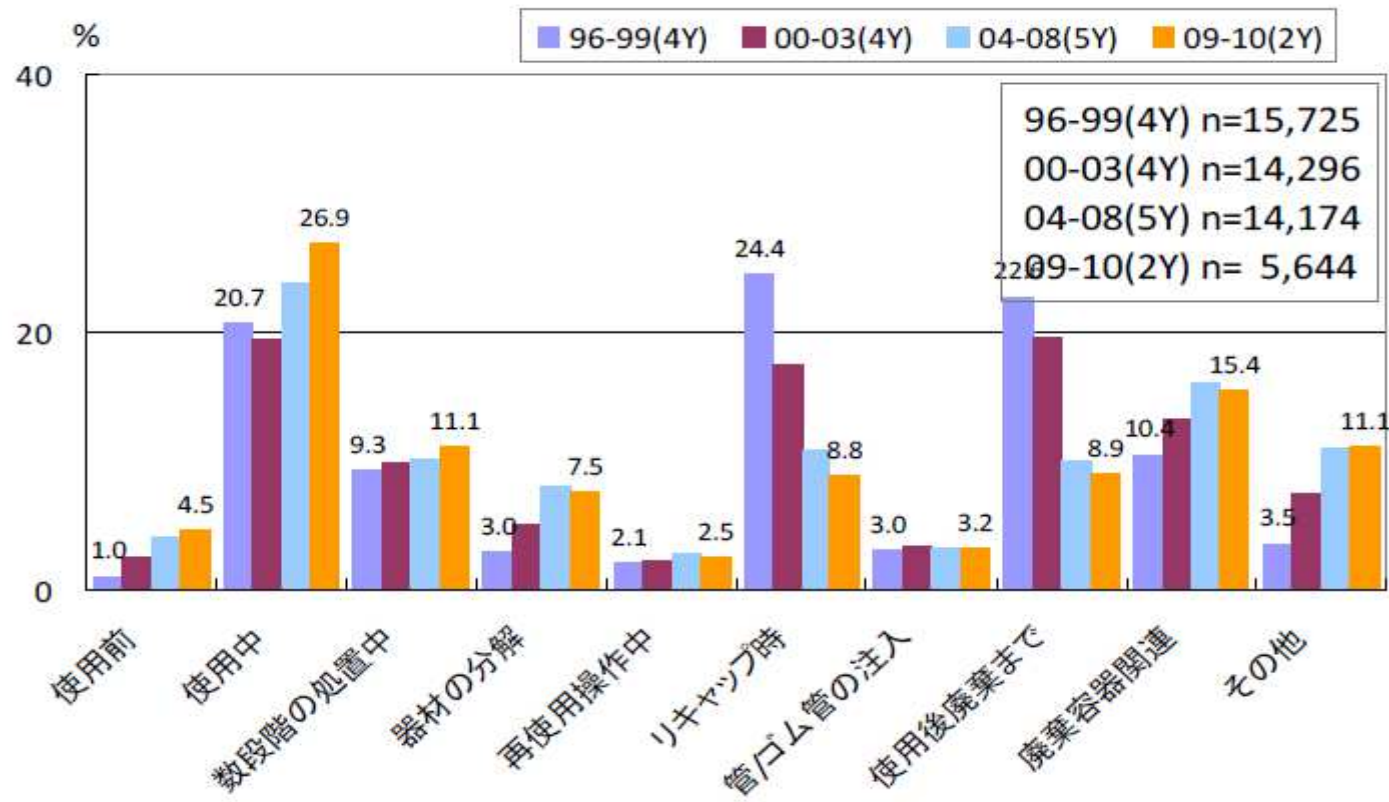
血液媒介病原体による 職業感染防止

- B型肝炎ワクチン接種を受ける
- 標準予防策の実施
- 鋭利な器材を安全に取り扱う
- 使用後の針へのリキャップは厳禁
- 安全器材を積極的に活用する
- すべての曝露を速やかに報告して感染予防処置とフォローアップを受ける

どのような場面で発生するか

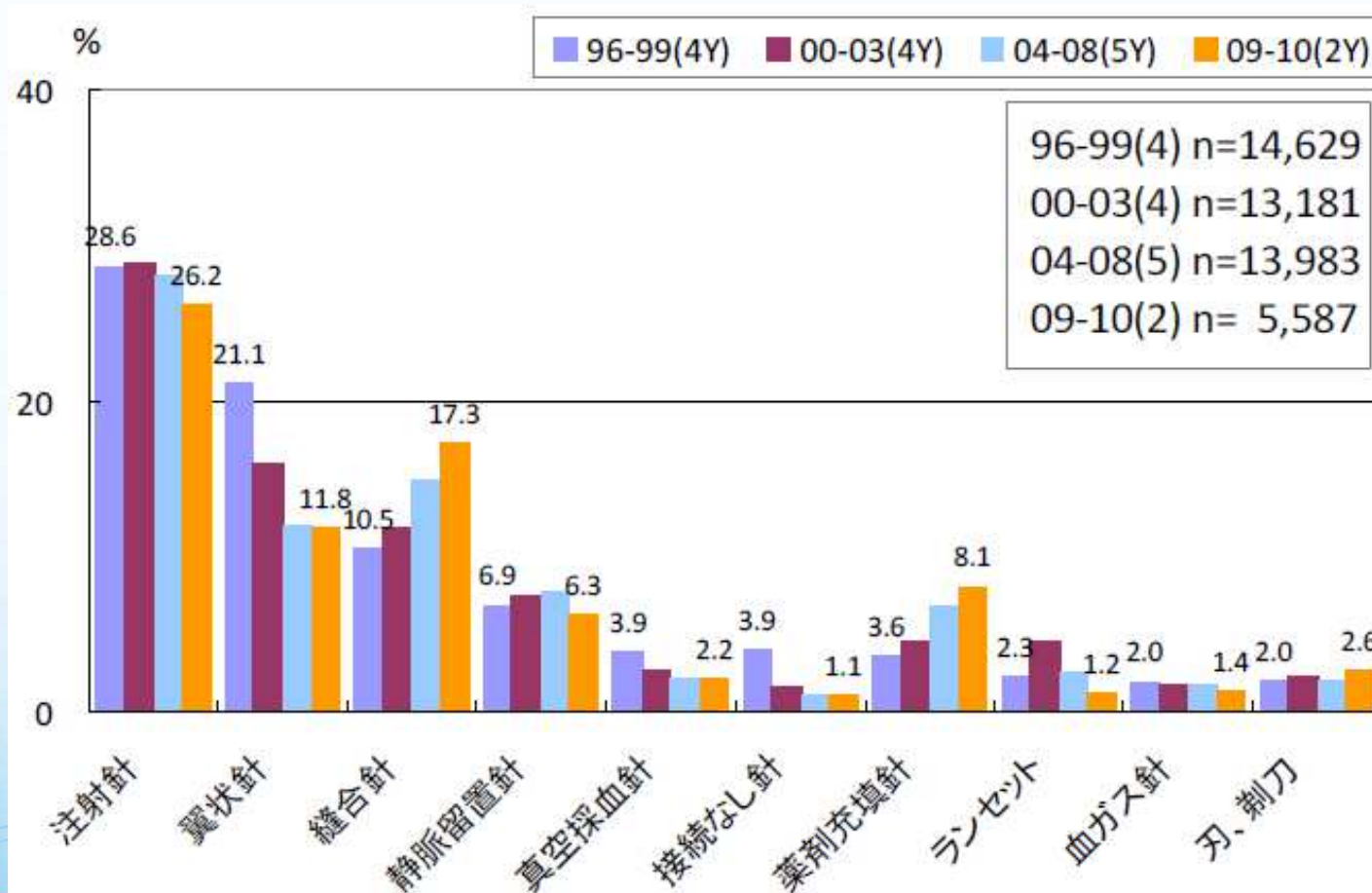
- 2012 年現在、国内の約1,200 の病院等で利用されているエピネット日本版参照。
- 全国エピネット日本版A2011 調査とは
 - 全国エイズ拠点病院より収集された1996 年度～ 2010 年度のエピネット日本版A(針刺し・切創報告書)のデータ(51,000 件、のべ施設数1680 施設)をデータベース化し、Episis201 等で解析した結果を、1996 年度～1999 年度、2000年度～2003 年度、2004 度～2008 年度、2009 年度～ 2010 年度の4時期で比較し、経時的な状況変化 をまとめたものである。

針刺し・切創の発生状況



- 使用中が最も多く(26.9%)、廃棄容器関連の受傷(15.4%)、数段階の処置中(11.1%)、使用後廃棄まで(8.9%) の順となっている。「リキャップ」「使用後廃棄まで」による針刺しが全体に占める割合は減少傾向が続いており、使用前、器材の分解、廃棄容器関連の針刺しの割合が増加傾向である。「全国エピネット日本版A2011 調査結果 より抜粋」

針刺し・切創の原因器材



- 針刺し五大原因器材は、注射針、縫合針、翼状針、静脈留置針、薬剤充填針である
「全国エピネット日本版A2011 調査結果 より抜粋」

Q & A (1)

使用後、危険なのでリキャップをするようにしている

YES

☐ NO

針刺しはリキャップ時に最も多く発生します。使用後の針はその場で針捨て容器に捨てるように環境を整える必要がある

Q & A (2)

感染症が判明している患者に使用した針で
針刺しを起こした場合はただちに刺入部から
血液を搾り出す

YES

☐ NO

刺入部位を洗淨するだけでよい

Q & A (3)

B型肝炎はワクチン接種をして抗体を獲得していても曝露後グロブリン投与が必要である

YES

☐ NO

Q & A (4)

HIVの曝露後、2時間以内に予定内服できなければ効果がないので行なわない

YES

☒ NO

Q & A (5)

HIV曝露後は、感染予防のために直ちにインターフェロンを投与する

YES

☒ NO

参考文献

- 本田章子,医療従事者に求められる麻疹・水痘・風疹・ムンプスへの対策.インフェクションコントロール. 2008年 17巻9号 p. 29 -35, メディカ出版
- 国公立大学附属病院感染対策協議会,病院感染対策ガイドライン 改訂版. 株式会社じほう, 2012.
- 内田美保編著, 感染管理の実践.医歯薬出版株式会社,2012.